九州天皇家論
章　大八州

九州天(あま)王朝誕生

淡道之穂之狭別嶋

國生み神話は「天(あめ)の沼矛」の物語、つまり、銅矛圏での建国物語である。最初に「國産み」した「淡道之穂之狭別嶋」は銅矛圏の島である。

島の名前の意味

(1)　嶋の名前は「淡道之穂之狭別嶋(あわじのほのさわけのしま)」である。「穂」とは稲穂と考えられる。この島は稲穂のような形をしている島というイメージである。
島の名前は「狭別」である。「別」については文注は「別を訓みてワケと云ふ」と書いている。「別」は分かれという意味で、「狭」は普通の意味で「狭い」であろう。従って、「穂の狭別」とは、「稲穂」のような形をしており、大きな島から「分離」した「狭い島」という意味を持つ。つまり、この島はぽつんと孤立して存在する島ではなく、一つの大きな島のそばにくっついている稲穂のように細長い小さな島である。

(2)　嶋の名前「淡道之穂之狭別嶋」の「淡道」は「あわじ」と訓まれている。「兵庫県淡路島は四国の阿波(徳島)へ途中に存在する。故に、阿波への路、淡路島なのだ。」という俗説がある。この俗説は案外的を射ているように思われる。が、「州産み」に登場する「淡」とは四国の阿波(徳島)ではない。
日本書紀では伊邪那岐命・伊邪那美命は「淡路島」を産む前に、「淡州(あわのしま)」を産んでいる。

> 遂に為夫婦して、先ず蛭子を生む。便ち葦船に載せて流りてき。次に淡州を生む。此亦兒の数に充れず。　　日本書紀神代第四段

伊邪那岐命夫婦は「淡州」を生んだ。しかし、「淡州」は「兒の数に充れず」とした。よほど小さな嶋だったのであろう。しかし、四國阿波は淡路嶋より大きい。國生みの「淡州」と四國阿波とは異なる。次に、「淡道之穂之狭別嶋」を生んだ。「淡州」から「淡道之穂之狭別嶋」へ渡ったのである。従って「淡道」の意味は、「淡州への道」ではなく、「淡州からの道」という意味となろう。「淡路島」とは、「淡からの道に存在する島」という意味である。「淡州」と「淡道之穂之狭別嶋」はお互いに近い所に存在していたはずである。

仁徳天皇の「淡路島」の歌

この長い名前の島は、「淡路島」として記紀に登場する。古事記に仁徳天皇の有名な歌がある。

> 「淡路島を見むと欲ふ」とのりたまひて幸行でましし時淡路島に坐して、遙に望けて歌曰ひたまひしく
> おしてるや　難波の崎(さけ)よ　出で立ちて　我が國見れば　淡島　自凝島
> あじまさの島も見ゆ　放つ島見ゆ
> とうたいたまひき　　(仁徳記)

この仁徳天皇の歌から次のように判断できる。

(1)　歌われた「難波の崎」とは「淡路島の岬」である。この根本を曲げてはいけない。この岬は「難波」に面している。「難波」とは海の名前であるが、この名前は神武東征の時、神武が「浪が速い」と云ったことに由来する。「浪が速い」が訛って(変化)して、「難波」となったのである。また、「おしてるや」の「おす(忍)」は「朝日を浴びて輝く」という意味である。「難波の崎」は「難波」の海の西側に位置したと考えられる。

(2)　仁徳天皇は「淡路島」の「難波の海に面した崎(岬)」でこの歌を歌った。その岬から「淡島」「自凝島」「あじまさの島」「放つ島」の四島が見えた。仁徳天皇は「淡路島の岬」から一番近くに見える島として「淡島」を取り上げた。「淡路島」の一番近くに「淡島」、次が「自凝島」、順次、「あじまさの島」、「放つ島」が存在していた。

(3)　兵庫県「淡路島」から大阪方面にはいかなる島も見えない。兵庫県「淡路島」と國生み「淡路島」とは別の島である。

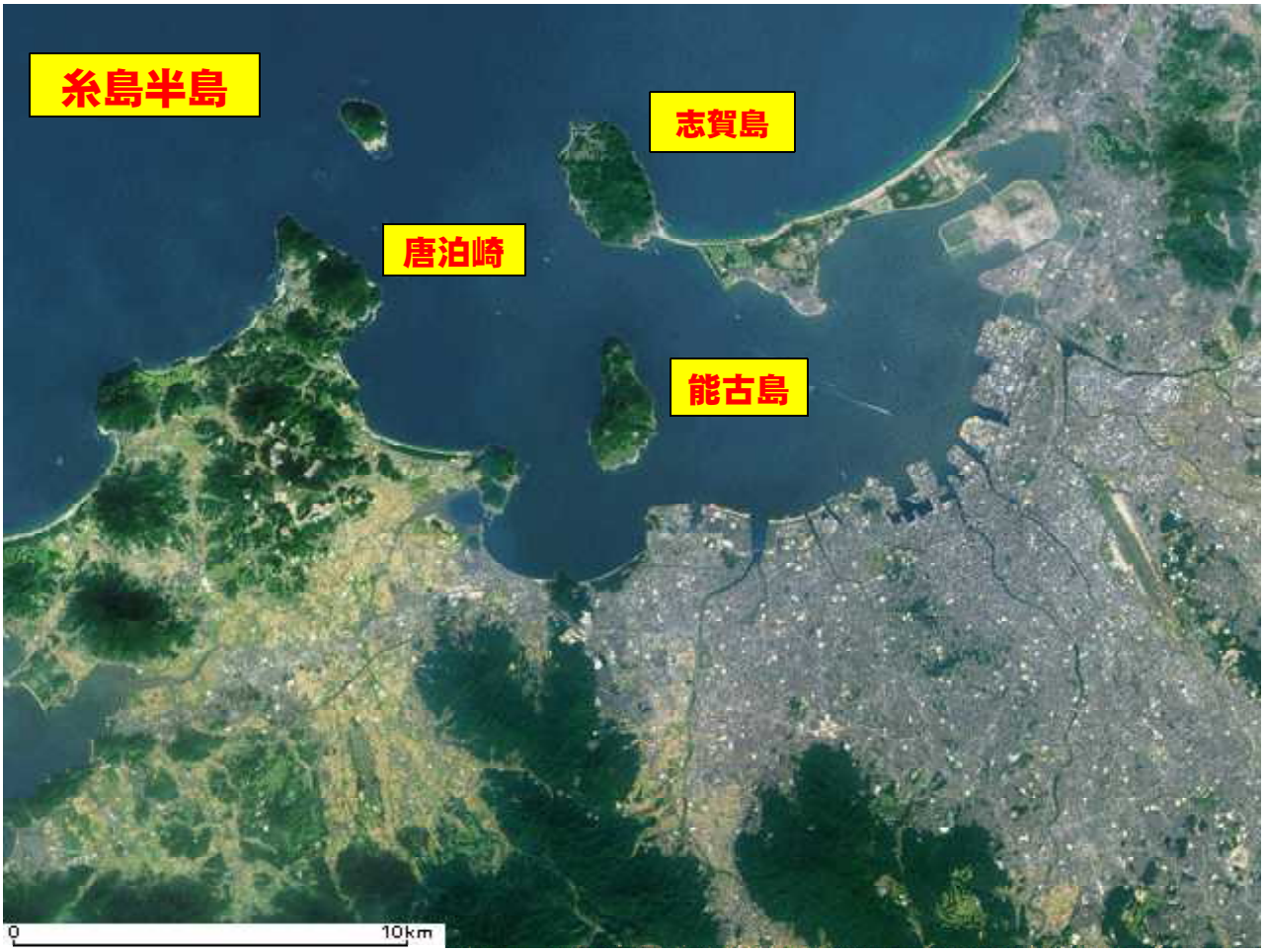
「淡道之穂之狭別嶋」の意味、仁徳天皇の歌、この二つのヒントから「淡道之穂之狭別嶋」を特定しよう。

第一の候補地　糸島半島

(1)　糸島半島には「怡土」と「志摩」の二つの国があった。糸島水道の北、志摩町・福岡市西区が一つの國でかっては島だった。「志摩」という地名がその名残である。

(2)　糸島半島の先端・宮浦には唐泊崎がある。この岬は博多湾に臨む岬である。

(3)　博多湾には「能古(のこ)島」が存在する。「自凝島」の名前とよく似ている。事実、この「能古(のこ)島」が「自凝島」だと考える研究者もいる。糸島半島の「唐泊崎」は「淡路島」の有力な第一候補である。だが、博多湾は「難波」と呼ばれるような海ではない。



第二の候補地　東松浦半島

(1)　東松浦半島も候補地の一つである。唐津湾には高島をはじめ大島が存在する。唐津湾に臨む岬も存在する。

(2)　だが、唐津湾は「難波」と呼ばれるにふさわしい海とはいえまい。

第三の候補地　有明海

(1)　有明海も候補地となる。
(2)　しかし、有明湾には島がない。また、かっては島だったが、現在は陸続きとなったと見える半島もない。
(3)　有明海は「難波の海」と云える海ではない。湾の中で、海流はおだやかである。

第四の候補地　若松区

(1)　北九州市若松区は現在「島」ではない。しかし、古地図によると、洞海湾は西へ延び、遠賀川の下流と繋がっていた。若松区はかっては島だったと云える。
(2)　仁徳天皇の歌に登場する海は「難波の海」である。関門海峡は「難波の海」である。この海は潮の流れが速い。響灘と周防灘の水位の差によって東流、西流する「難波の海」である。
(3)　兵庫県淡路島の北端に「岩屋」がある。対岸は「芦屋」がある。また、兵庫県の地名には「塩屋」がある。同じように若松区にも「岩屋」があり、「芦屋」、「塩屋」がある。同じ地名が三つ重なるのは現在の「淡路島」と古代「淡路島」との間に相関関係が存在したからであろう。國生み神話の「古代淡路島」が先にあって、現在の「淡路島」は後にその名前が付けられたと考えられる。
(4)　「州生み」で云う古代「淡道之穂之狭別嶋」とは北九州市・若松区の東端が最もふさわしい。

現在の淡路島は「青銅器分布図」では「銅鐸圏」に入る。「若松区」は「銅矛圏」である。「銅矛」によって國作りをしたという説話にふさわしい。
では、「若松区」が果たして、嶋名の意味、及び仁徳天皇が詠った情景を満足させるか。詳細に検討すべきであろう。

(1)「淡道之穂之狭別嶋」という島名
「淡道之穂之狭別嶋（あわじのほのさわけのしま）」は「稲穂」の形をしている。その嶋は大きな嶋から分離した嶋であるから、隣に大きな嶋が存在する。また、近くに「淡嶋」という小さな嶋が存在する。このような条件を満たさなければならない。「若松区」を拡大してみよう。

若松区の東端の島影は左の大きな島影とは少し離れている。「淡道之穂之狭別嶋(あわじのほのさわけのしま)」の表記の中の「狭別(狭いわかれ)」にふさわしい。そして、その形状は垂れ下がった「稲穂」のように見えないこともない。「穂之狭別」とはこの形状を云ったのであろう。若松区の東端は「淡道之穂之狭別嶋」という名前をほぼ満足させる。

(2)仁徳天皇の歌

もう一度、歌を見てみよう。

「淡路島を見むと欲ふ」とのりたまひて幸行でましし時淡路島に坐して、遙に望けて歌曰ひたまひしく
おしてるや　難波の崎よ　出で立ちて　我が國見れば　淡島　自凝島　あじまさの島も見ゆ
放(さけ)つ島見ゆ
とうたいたまひき　(仁徳記)

仁徳の歌では「淡路嶋」は一つである。「穂之狭別」と本島は区別されていない。「穂之狭別」は「淡路嶋」の東端に過ぎない。だが、仁徳天皇が「坐して」歌った「淡路嶋」の場所とは「國産み」の「穂之狭別」である。ここに仁徳天皇の宮があった。仁徳天皇が「坐して」歌った場所とは現在の「高塔山公園」である。ここから海が見える。では、ここから見る海に島があるのか。「淡路嶋」に一番近い島が「淡州」と考えられる。だが、高塔山公園から見てすぐ近くに島はない。陸である。だが、航空写真で見ると高塔山のすぐ北にかっては島だったと思える島影が浮かぶ。おそらくこの丘が「淡州」であろう。

私も高塔山に登って関門海峡を見たが、多くの島は存在しない。仁徳天皇のこの歌は別項(「九州天皇家論4章仁徳天皇」)で詳述するが、仁徳のこの歌で最も重要な島は「放(さけ)つ島」である。この歌は、仁徳の后の嫉妬から「吉備」に帰された恋人を思って歌った歌である。なぜ、「放(さけ)つ嶋」が歌われたのか。その恋人が「放つ島」に居るからである。「放つ島」には恋人の里「吉備」が存在した。ゆえに、仁徳は「放つ島見ゆ」と結ん

だのである。では、この「放つ島」を「難波の崎（高塔山公園）」から今もはっきりと見ることができるのか。むろん、見ることができる。肉眼ではっきり見ることができる。

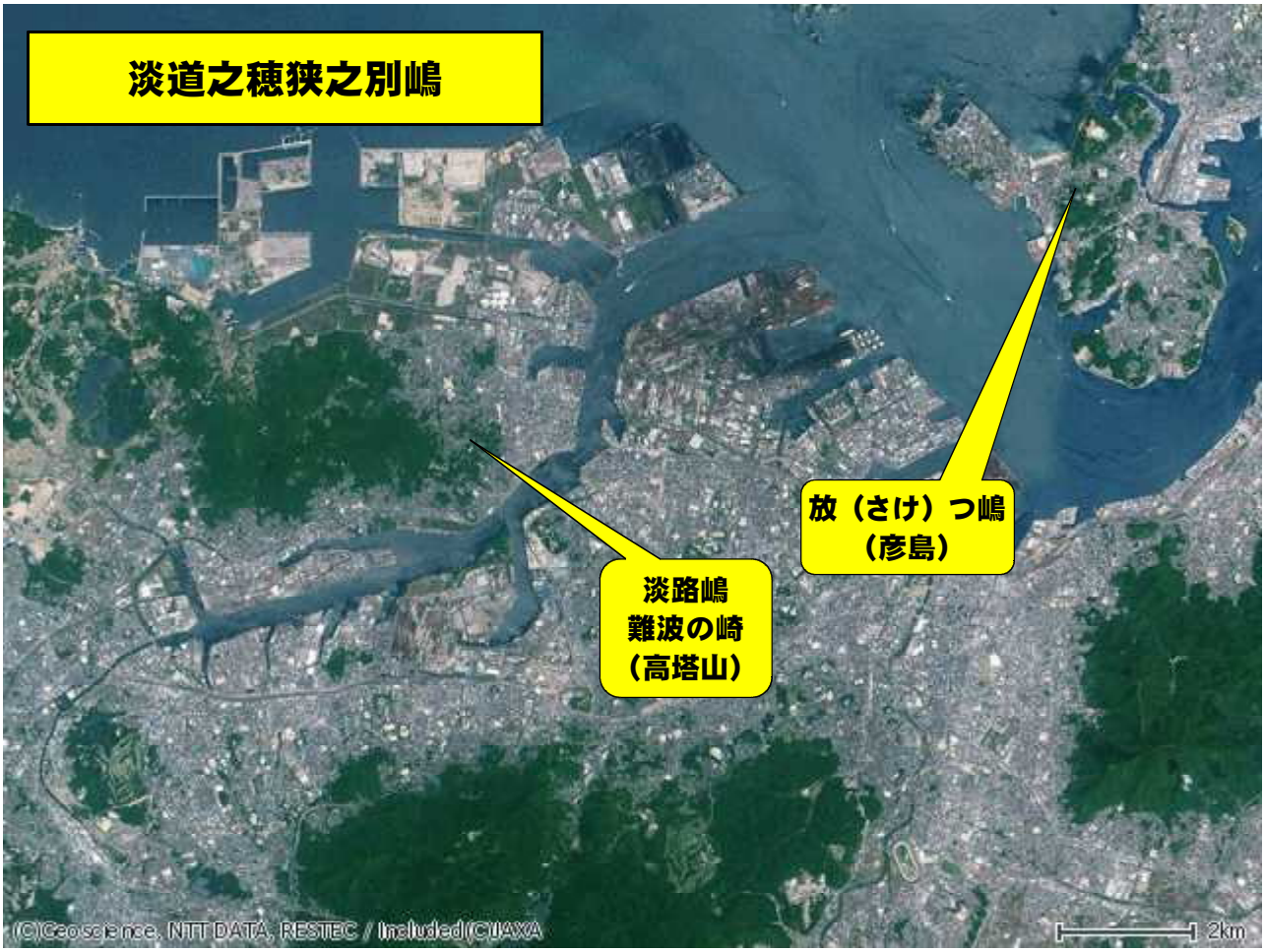
「放（さけ）つ嶋」という異様な名前の嶋とはどこか。航空写真でさらに詳しく見てみよう。まず、北九州の洞海湾を見てみよう。元々「若松区」と「八幡東区」「八幡西区」は地続きであったのが、何かの原因で「裂けた（割れた）」ように見える。「裂けた（割れた）」と見えるのはここだけではない。下関市彦島もそうである。彦島も下関大和町と「裂けて（割れて）」できた島である。小瀬戸を除去するとほぼ完全につながる。糸島半島も同じである。

超古代、北九州一帯に大規模な地殻変動が起こって「若松区」・「彦島」・「糸島半島」が“裂けて”島となった。もう少し巨視的に見ると、関門海峡も大きな力で本州山口県と九州が引き裂かれてできた海峡であろう。これほどの地殻変動の記憶・記録は全く残っていないのであろうか。恐らくこれであろう。

古事記
「天地初めて發（ひら）けし時」
日本書紀「神代上」
「古（いにしえ）に天地（あめつち）未（いま）だ剖（わか）れず」
「天地初めて判（わか）るるときに」

通常、「天地」は「てんち」と読まれ、「天（てん）」と「地（ち）」が分かれたと解釈されている。しかし、古事記・日本書紀とも、「あめつち」と訓み仮名を打っている。「てん・ち」とは読まない。「天（てん）」と「地（ち）」が分かれた記憶は人類にはない。ここは「天（あめ）」「地（つち）」と読むべきである。

これは何を示すのか。記・紀の冒頭の最古の神話は超古代、地殻変動（または地震）によって「あめ」と「つち」の二つの国に引き裂かれたことを記録している。その場所は北九州である。彦島・若松区・糸島半島などはその地形から察して、日本書紀神代上に描かれた「天地初めて判るるとき」の状況に合致する。この「磐裂（いわれ）」の地こそが最古の神話の舞台である。 仁徳の歌に歌われた「放（さけ）つ島」もこうしてできた島である。

ゆえに、「放（さけ）つ島」と呼ばれていたのである。では、仁徳が「高塔山公園」から見て、「放（さけ）つ島」と歌った島とはどの島か。下関市彦島である。

仁徳天皇が渡った「淡路嶋」とは若松区、歌われた「放（さけ）つ嶋」とは彦島である。「難波」とは関門海峡である。「難波の崎」とは若松区の東端、高塔山公園である。古事記は全ての国作りを終えて、伊邪那岐命が隠遁した場所を「淡路嶋」と書いている。その場所とは高塔山公園である。ここに伊邪那岐命の宮が作られた。関門海峡に臨み、向こうに彦島を見ることができる高塔山公園は伊邪那岐命以来、宮が作られてきた。仁徳の宮もまたこの公園にあったのである。